私も一度は呼びたかったお父さんと

粕屋郡古賀町　　斉藤　ユキ子

私の父は、福岡県筑紫郡太宰府町北谷に、農家の三男として生れました。

母は、佐賀県三養基郡鳥栖町大字真木に、農家の三女として生れました。

父と母の出逢いは、二日市の紡績工場だと聞かされておりました。今で言う職場恋愛結婚でした。父は、とても真面目な人で、趣味は宝満山での四季の野山散策だったようです。嗜好品は、ぜんざい、おはぎ、団子、甘い物づくしの甘党でした。母はその反対でトンチがあり、朗らかな人で辛党です。夜寝る時も、ワンカップ一杯「ギュー」と飲んで、熟睡できると喜んでおりました。その母も、現在は、８８才で古賀町の北九州古賀病院で入院療養中です。

戦地に行く前の父の職業は、志免炭坑の運搬班だったようです。住居は志免炭坑の５坑の長屋でした。昭和２０年６月３０日、時刻不明、中華民国湖南省羽湯縣に於て戦病死でした。昭和２０年、私は小学校１年生入学でした。父の顔を知らないで成長しました。後日、戦友上官の方が訪ねて来られ、戦地での一部を話されました。母との出逢い、三人の子供の事、宝満山の春夏秋冬の事、思い出等をしょっちゅう話していたそうです。どんなにか故郷を思い、愛していたかが解りました。もう一度、日本の土を踏みたかったと思います。

父の死後、母は志免鉱業所の本部で約２０年間働きました。業務は雑役でした。鉱業所での人員削減、配置転換等で、年とってから肉体労働の方に変わり大変だったと思います。けれども、愚痴一つ言わず一生懸命働きました。母は、土曜日の夜は本部の宴会とか、マージャンとかの手伝いに行っておりました。歌や踊りも上手で、皆に愛され、引っぱりだこの母でした。帰りにはお菓子や果物折箱等、沢山のお土産が有りました。

私と兄は寝ずにお土産を待っていました。兄は「俺が大きくなったら、こんなご馳走をたらふく食べさせてやるからな」と、子供心に私に言っておりました。母の給料日は２０日でした。母の給料日には森永のキャラメル、あみだくじで当たったきんつば、お菓子が沢山風呂敷に入っていました。私達にとって２０日が一番楽しい日でした。

父の出征時、妹は母のお腹にいましたが、昭和１７年にジフテリアにかかり志免国鉄の病院で死亡しました。母は、何度か出産しましたが子宝に恵まれず、兄を養子にもらったそうです。私達の衣料は、父母の着物が洋服に早変りしました。父の国防色の作業衣が、兄の洋服に。私の入学式の洋服は、セルの生地でワンピースが仕立上がりました。他に隣り近所の人のおさがりを順次もらい受け継ぎました。盆踊りのワンピースには、絽の着物が利用されました。私は、それを着て嬉しかったこと。町内の広場に集まり、やぐら太鼓を囲み、うちわを持って、いつまでも踊りました。天竺木綿は、色は黒いが、洗えば洗うほど白くなるので、枕カバー、敷布、包帯にと利用したものです。ネルは、少し毛羽立っていて、「クーン」と匂いがして、身も心も暖たかくなる感触の代物でした。下ばきに、ねまきに利用価値のある存在でした。

私達の食生活は、コウリャン飯、アワ飯、さつま芋飯、大根飯、麦御飯といろいろ食べたものです。唐芋、カボチャの団子汁は、いやというほど食べたものです。米も配給で、色も黒く、一升びんに入れて、棒でつついて白米にしたものです。パンのできるイーストの匂いが、何とも言えない宝物でした。コッペパンの美味しかったこと、忘れることができません。今でもコッペパンが大好きな私です。私が一番思い出に残っているのは、兄がいつも私の弁当箱を開けて見るのです。私のには良い物が入っているのではないかと思ったのでしょうか？。陽気な母もこの事には大変心配したようでした。これも食糧難ではの仕業だったのでしょうか？。米泥棒にも会いました。野菜はどこの家も前に畑を作り、トマト、胡瓜、なすび、唐芋、とうもろこし、砂糖きび、あらゆる野菜を植えておりました。特に南瓜は棚を作り這わせておりました。「ぼうぶら」と言って、長い南瓜ができました。おやつ替りに、砂糖きびはよく食べたものです。歯で皮をすごきながら、むしゃむしゃと甘い汁を吸い、繊維物を吐き出したものです。

住居は長屋で七輪をおこし煮炊きをしました。おくどさんが有り、こえ松とたきもんを使い鉄釜で御飯を炊きました。おこげ御飯ができて塩を少しふり、美味しく食べたものです。七輪で魚を焼いたり、思い思いのおかずができあがり、「あんた方今日は何のおかず」、「うちん方はこのおかず」と言っては交換したものです。米、味噌、醤油、足りなかったらすぐ隣り近所に走ったものです。病気だといえば薬を持ち寄り、急病と言えば、リヤカーで志免国鉄の病院に運んでもらいました。回覧板を持って行ってはあがり込み、お茶を飲んだり、話に花を咲かせ、ちょっとのつもりで鍋をこげつかせたものです。

向こう三軒両隣り、人と人とのつながりを大切にしたものです。穏やかな生活の中にも、空襲時下においては、防空頭巾、モンペ、救急袋にいり米、カンパン、水筒、薬、懐中電燈等は、欠かせない必需品でした。就寝前には、身の回りの物一切を枕元に置きやすみました。電気には黒い布をかぶせ、灯りのもれるのを防ぎました。無気味なサイレンが鳴る度に、防空壕に走ったものです。「今博多が燃えよう」防空壕の中で人々のどよめきを、ぶるぶると身体を震わせ固まっていました。大勢の人が博多の方角を指して呆然としていました。

今、戦後５０年振り返ってみますと、長いようで短かった月日。勉強勉強と言われることもなく、戸外で日の暮れるまで、伸び伸びと遊んだ日々。楽しかった子供の頃だけが、思い出されます。物資にも恵まれ飽食の時代にありながら、何か一つ足りない物があると思います。今後も、それを良く見極め、生活するのが大事だと思います。子供達、孫、と明るい日本社会であって欲しいと思います。二度と戦争のない国であって欲しいと思います。私も一度は呼びたかったお父さんと。